目　次

はじめに――米国の対中東政策とパレスチナ問題 3

１．パレスチナの現況と分離壁 5

２．分離壁のもたらす人道的インパクト 7

壁とは何か 7

分離壁がもたらすパレスチナ人の移動の不自由 12

分離壁がもたらす物理的、経済的インパクト 16

引き裂かれた家族 18

おわりに 19

参考文献 22

はじめに —— 米国の対中東政策とパレスチナ問題

2001 年の同時多発テロ事件後、米国のブッシュ政権が開始した「新しい戦争」は、「テロとの闘い」という終わりのない戦争を意味している。2003 年 3 月に米英主導で始まったイラク戦争は、今や内戦に近い状況を呈している。そもそも何をもってテロと考えるのか、ほとんど何の定義もないまま、その時々の状況で米国が「テロ」と名指した者や組織がテロリストとして捉えられ、それに対し国際社会が迎合しているとの指摘もある。イラク戦争前夜は、昨年末処刑されたサッダーム・フセインのイラクが大量破壊兵器を保有しているゆえに、イラクはテロ国家と名指され、続いてアルカーイダをイラクが匿っているという容疑でイラクはテロ支援国家であると、ブッシュ政権は命名した。しかし大量破壊兵器はイラクにはないことが後に判明し、アルカーイダも戦争前夜存在したかどうかは証明されていない。

イラク戦争は、中東の民主化を推進するための先陣を切る戦争であると米国は位置づけた。だが、イラク新政府が樹立された今も、状況は混沌としている。中東の民主化という米国のスローガンが果たして内実を伴ったものであるかどうかを判定するには、今後の中東全体の動向を見なければならない。

イラク戦争が内戦化するなか、米国内でも米国の中東政策の見直しを提言する動きが出ている。前ブッシュ政権期に国務長官であったベーカー氏と上院議員のハミルトン氏らが中心となって超党派から構成されている「イラク研究グループ」は、2006 年 12 月上旬にいわゆる「ベーカー・ハミルトン案」を提示した。そのなかで、イラク戦争の打開策として段階的な米軍の撤退とシリア、イランとの対話を進めることが提案されている[1]。 さらに重要なのは、本提案のなかで、米国のイスラエル寄りの政策が中東和平の行き詰まりを生んでいることを指摘し、米国の親イスラエル政策を見直し、中東和平に積極的に乗り出すべき

1 James A. Baker, III, andLee H. Hamilton, Co-Chairs. *Iraq Study Group Report.* [http://www.usip.org/isg/iraq_study_group_report/report/1206/index.html]

であると提言している点である[2]。 ブッシュ政権が、この案を受け入れて政策転換を図ることはむずかしいとの見解もある[3]。 しかし、ベーカー・ハミルトン案が中東和平に言及し米国の親イスラエル政策を批判している点は注目に値する。また、イラク政策の見直しに関する提言のなかで中東和平へのイニシアティブが重要であると指摘している点は、中東政治のなかでパレスチナ問題がいかに重要な課題であるかを明示している。

写真 1 ：エルサレム――重なり合う聖地

本稿では、混迷が続くパレスチナ問題の現状について、人間の安全保障という観点から建設が進行するヨルダン川西岸の分離壁がもたらす人道的インパクトについて、筆者が実施した現地調査に基づいて考察する。筆者は、2005 年 11 月下旬から 12 月上旬にかけてエルサレム及びエルサレムの近郊のパレスチナの村落であるアイザリヤにて、アイザリヤ評議会メンバーの協力を得て、分離壁の実態とそのインパクトについて住民に聞き取り調査を実施した。また、筆者はイスラエルの人権 NGO であるベツレム、エルサレムのパレスチナ占領地・国連人道問題調整事務所 (UNOCHA・oPt)、東エルサレムのパレスチナ人権モニタリング・グループでの資料収集と関係者へのインタビューも行った。本稿は、2006 年 5 月エルサレムにおいて同機関で再度実施した聞き取り調査にも基づいている。

2 前掲書 p.7.

3 ジョンホプキンス大学が 12 月上旬に出した「イラク研究グループ報告分析」はそう指摘している。

1．パレスチナの現況と分離壁

パレスチナはガザ地区とヨルダン川西岸というイスラエル国家内の二つの飛び地から構成されている。1967 年の第三次中東戦争以降、パレスチナはイスラエル軍の占領下にある。1993 年のオスロ合意以降、これまで部分的な自治が実施されたが、イスラエルとの全面的な和平への道のりは厳しい。

そうしたなか、2006 年 1 月のパレスチナ評議会選挙でイスラーム政党のハマスが大勝した。ハマス自身予想しなかった結果であった。2004 年秋に死去したアラファト議長の独裁的な政治が終焉したパレスチナ自治政府は、2006 年の選挙で、従来の世俗政権ファタ派からハマス勢力に政権が交代した。この選挙は、これまでのパレスチナの選挙のなかでもきわめて民主的な選挙であると言われている。にもかかわらず、欧米諸国はパレスチナ人が自ら選んだハマス政府をテロリストと命名し、イスラエルとともにパレスチナ政府に対し経済制裁を課し、今日に至っている。その大きな理由のひとつは、ハマスがイスラエルを国家として承認しないこと、またこれまで締結された中東和平に関する協定や合意を受け入れないという点がある。イスラエル、欧米の経済制裁に直面し、パレスチナ政府は極度の財政難に直面し、自治政府の職員への給料が選挙後 2 ヶ月以上も支払えない事態に追い込まれた。パレスチナに住むパレスチナ人の 3 割から 4 割の人々が何らかの形で自治政府から給料をもらっているという事実を鑑みれば、欧米諸国とイスラエルの経済制裁がパレスチナ人たちの生活に大きな打撃を与えていることは想像に難くない。

イスラエルはハマス政権の発足後、パレスチナ人がガザ地区からイスラエルに出入りできないようにガザを 2 ヶ月以上連続して封鎖し、2005 年 6 月からは、ガザ地区などパレスチナ自治区に対して大攻撃をし始めた。ガザ地区は今やイスラエル軍が再占領した形となっている。イスラエル軍はシャロン首相の主導で 2005 年 9 月にガザ撤退を果たし国際社会の注目を浴びたが、それもわずか 8 ヶ月しか続かなかったのである。2006 年 5 月よりハマス政府の議員を相次いで拘束し、その後は閣僚メンバー 8 名をも拘束するに至り、拘束されたハマス

議員と閣僚の数は 6 月下旬には 30 名を超した。2006 年ハマスによるイスラエル兵 1 名の拘束はこのような文脈でおこっていた[4]。

こうした状況に対し、パレスチナ人のあいだでイスラエルに対する不満や憎悪が高まったが、それは単にイスラエル政府やイスラエル人に対して向けられるに留まらなかった。ファタ派支持者がハマス支持者に対して、ハマス支持者がファタ派支持者に対してその矛先を向け、パレスチナ人同士の殺し合いが 2006 年夏から激しくおこり、今日に至っている。

このようにハマス政権発足後のパレスチナ情勢は、治安の極度な悪化とともに暴力がさまざまな形で爆発している。これはこの一年のあいだに進展した事態であるが、もう少し時間を遡ってパレスチナ人の生活に重くのしかかってきたものがもうひとつある。ヨルダン川西岸をイスラエルから切り離すように建設されている、いわゆる「分離壁」である。分離壁は、2004 年に建設が開始され、パレスチナ人の移動の自由に多大な影響を与えている。以下、現地調査をもとに分離壁のもたらす人道的なインパクトについて論じることとする。

写真 2：エルサレム周辺の壁

4 筆者のエルサレム、エリコ滞在中（2006 年 5 月 5 日 –12 日）にまず拘束が勃発し、現地のラジオ放送、エルサレム・ポスト紙などで報道された。その後の経緯は、筆者がイスタンブール滞在中（5 月 12 日 –25 日、6 月 14 日 –7 月 14 日）トルコの国営放送による。

2. 分離壁のもたらす人道的インパクト

壁とは何か

パレスチナの地のうちヨルダン川西岸とイスラエルのあいだには、1967 年の第三次中東戦争後画定されたグリーンラインと呼ばれる境界線がある。境界線といっても実際には、ヨルダン川西岸には第三次中東戦争の前後に建設されたイスラエルの入植地がまだら模様のように存在するため、グリーンラインより東側がすべてパレスチナ人のものというわけではない (地図 1 参照)。また、1993 年クリントン大統領の仲介でアラファト議長とイスラエルのラビン首相のあいだに締結された、いわゆるオスロ合意により、イスラエル軍はヨルダン川西岸の占領地から徐々に撤退していく計画であったが、実際には撤退は計画どおりには進んでいない。さらに、エリコのような自治都市に行く場合でさえ、イスラエル軍が監視する検問所を通過しなければならないことから、ヨルダン川西岸は事実上イスラエル軍の占領下にあると言ってもよい。

「壁」という場合、主として 3 つに分けられる。第一に、コンクリートの塊のようなもので道路を閉鎖するものである。第二に、高さ 3 メートルから 7 メートルくらいまでの有刺鉄線で進入が不可能な状態にするもので、この鉄線が電気鉄線となっている場合もある。第三が、50 センチメートルから 1 メートル近い厚さのコンクリートの壁で、高い場所では 9 メートルに達するものある。一般に分離壁は第三のコンクリートの壁をさすことが多いが、実際には第二の鉄線が一般的で至るところに見られる。これらを総称して「壁」あるいは「バリヤ」と呼ばれるが、イスラエル政府やイスラエル国防軍は「治安壁」と称し、パレスチナ人やパレスチナ及びイスラエルの人権団体は「アパルトヘイト壁」と呼んでいる[5]。 本稿では、イスラエルとヨルダン川西岸とを事実上分離する役割を果たしているという点、後述の「一方的分離」政策の一環としての側面が強い点から、「分

5 Palestinian Human Rights Monitoring Group. *The Monitor: The Heaven Behind the Wall.* Sept. 2004,

離壁」という用語を用いる。

第一段階の分離壁は、トルカレム、カルキリヤ、ジェニンといったヨルダン川西岸の北西部の町を取り囲むように、約 145 キロメートルの分離壁が 2002 年 6 月に着工した。これらの地域は実際にパレスチナ人による自爆テロがおこった地域であり、イスラエル軍が「治安壁」と命名した背景がある。壁は、グリーンラインをパレスチナ側に割り込む形で建設されており、これら 3 つの町を取り囲む壁を境に、パレスチナの土地を 2％分イスラエル側に組み込んでいる[6]。

その後、2003 年 10 月、イスラエル国防省は、グリーンラインと壁とのあいだの地域を「シーム･エリア」（繋ぎ目エリア）と位置づけ、「軍事的に特別な地域」であると宣言した。このシーム・エリアに居住するパレスチナ人は、事実上、イスラエル軍の「特別な」管理下に置かれることになり、居住許可を申請せざるを得ない状況になった[7]。

このシーム・エリアは、分離壁の建設が進むに従い拡大しているが、グリーンラインをどの程度パレスチナ側に割り込んでいるのかについての統計は、ばらつきがある。ハモックト・センターというイスラエルの NGO の報告では、「分離壁の建設に際し、イスラエル国防軍は、パレスチナ人が個人で所有していた 6900 エーカーの土地を事実上没収し、パレスチナ側にあった 21 万エーカーの土地をイスラエル側に取り囲み、イスラエルは約 15％の西岸の土地を奪った」と指摘されている[8]。 他方、筆者が UNOCHA で実施した聞き取り調査では、10％という数字が挙がっている[9]。

---

6 B'Tselem. *Changes in the Route of the Separation Barrier.* (http://www/btselem.org, accessed December 10, 2006)

7 Palestinian Human Rights Monitoring Group. *The Monitor: The Heaven Behind the Wall.* Sept. 2004, endnote 6.

8 Hamoked Center for the Defence of the Individual. *Annual Report 2003,* p. 15. [http://www.hamoked. org]

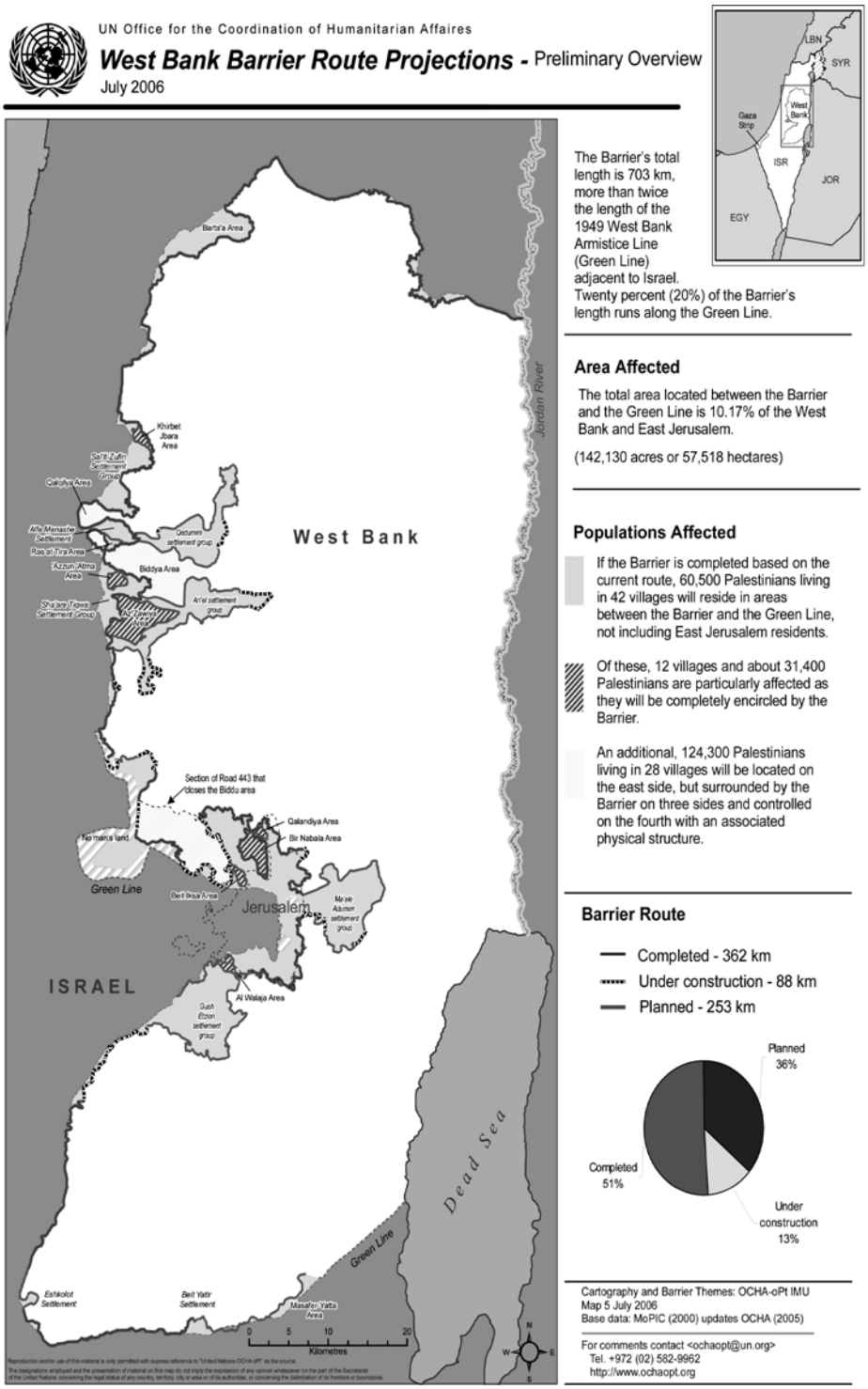
9 UNOCHA、分離壁のモニタリング担当者とのインタビュー（2005 年 11 月 30 日）。

建設が完成した壁は 2005 年 12 月現在 280 キロメートルであったが、2006 年 7 月には 362 キロメートルとなり、88 キロメートルが建設中、253 キロメートルが新たに建築する予定となっている (地図 2 参照)。2006 年のハマス政権が発足して以来、壁の建設は加速していると言われている。

地図１：ユダヤ人入植地

[出典：Jewish Virtual Library (http://www.jewishvirtuallibrary.org/jsource/History/settle2002.html)]

地図２：西岸の分離壁計画（2006 年 7 月）



[出典：http://www.ochaopt.org/documents/WB_Barrier_Projections_July06pdf]

分離壁がもたらすパレスチナ人の移動の不自由

イスラエルはパレスチナ過激派のテロからイスラエル市民を守るための「治安壁」であると主張してきた。しかし、現実にはテロがおこっていない地域やおこる可能性がほとんどない小中学校、砂漠、農地の地域まで壁が建設されていたり、今後の建設予定区域になっていたりする。壁のルートは、イスラエルの水利権と主な入植地をイスラエル側に組み込むことと、パレスチナ人の村落をイスラエル側から排除することという観点から決定されている[10]。 西岸の大入植地であるマーレ・アドミーム、ミショル・アドミームなどは、グリーンラインからはかなり離れているが、E1 プランというイスラエル人の入植者用の住宅、ショッピングセンター、娯楽施設などを建設するプランがあり、それらの大きな入植地をイスラエル側に組み込むために新たな壁のルートを計画している（地図３参照）。主たる壁の出入り口には必ず検問所があり、イスラエルに通行する許可書をもつパレスチナ人のみがイスラエルとヨルダン川西岸とを行き来できる。

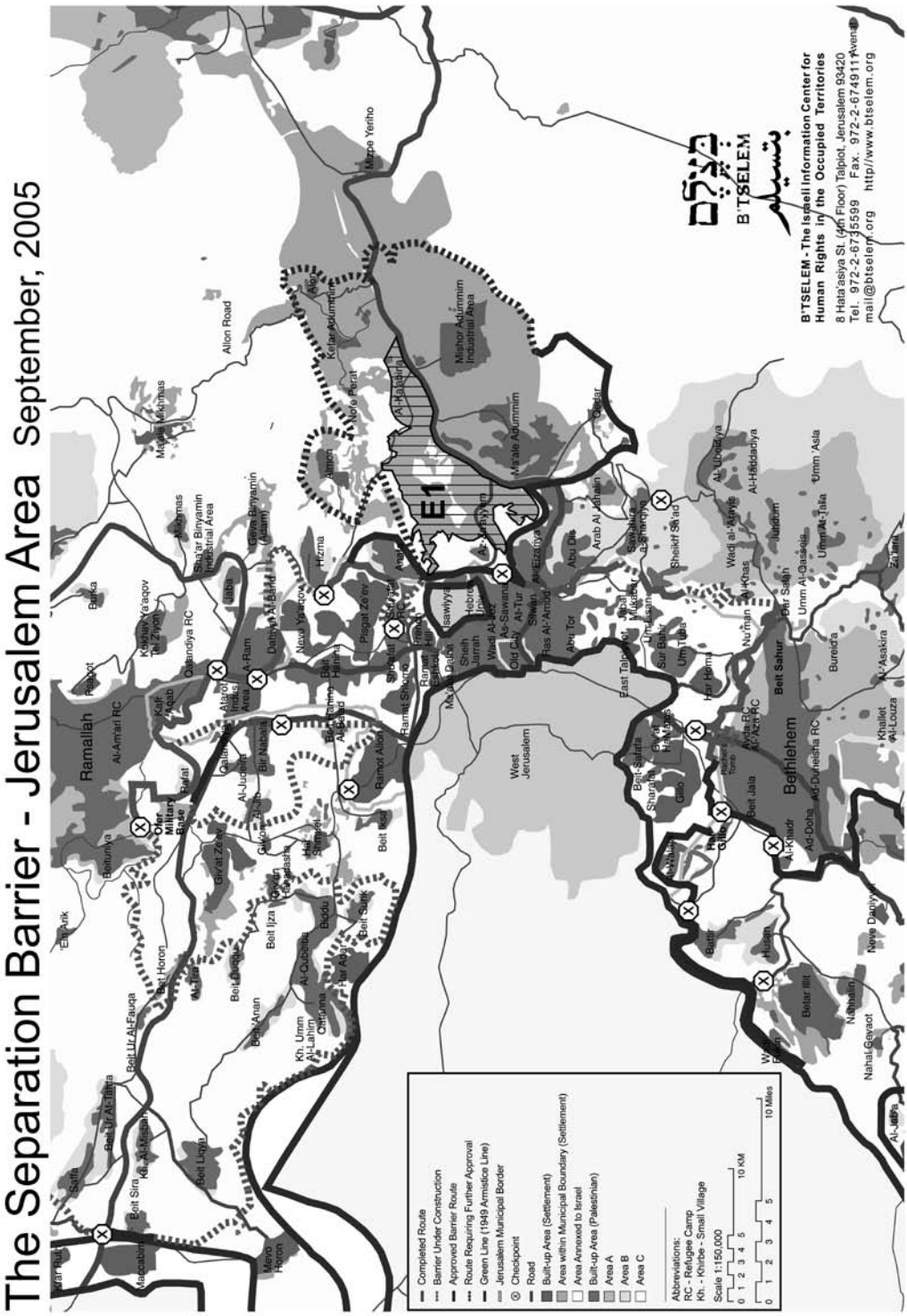
パレスチナ人はイスラエルへの行き来が可能かどうかという観点から３つに大別される。ひとつは、完全にイスラエルの市民権を持つ者、もうひとつはイスラエルの身分証明書（ブルーの ID）を持つ者，そしてパレスチナの地でのみ移動が可能なグリーンの ID を持つ者である。グリーンの ID を持つパレスチナ人が圧倒的に多数であるのはいうまでもない。

写真３：カランティア検問所
――エルサレムからラマッラへの出入り口

パレスチナ人は、1948 年の建国後、国を持たない民としてイスラエルの国家内に住んでいる人々が現在では 400 万人、ヨルダン、シリア、レバノンをはじめとする近隣諸国に 400 万人いると言われている。第三次中東戦争後、ガザ地

10　UNOCHA、分離壁のモニタリング担当者とのインタビュー（2005 年 11 月 30 日）。

地図３：エルサレム周辺の分離壁（2005 年９月現在）


The Separation Barrier - Jerusalem Area September, 2005
Completed Route
Barrier Under Construction
Approved Barrier Route
Route Requiring Further Approval
Green Line (1949 Armistice Line)
Jerusalem Municipal Border
Checkpoint
Road
Built-up Area (Settlement)
Area within Municipal Boundary (Settlement)
Area Annexed to Israel
Built-up Area (Palestinian)
Area A
Area B
Area C
Abbreviations:
RC - Refugee Camp
Kh. - Khirbe - Small Village
Scale 1:150,000
0 1 2 3 4 5 10 KM
0 1 2 3 4 5 10 Miles
Ramallah
Bethlehem
E1
West Jerusalem
Mizpe Yeriho
Allon Road
Ma'ale Adummim
Mishor Adummim Industrial Area
Ma'ale Efraim
Kedar
Nofe Ferat
Ma'ale Mikhmas
Shi'ar Binyamin Industrial Area
Giv'at Ze'ev
Ofer Military Base
Beit Ur Al-Fauqa
Beit Ur Al-Tahta
Beit Sira
Beit Liqya
Beit Horon
Beit Iksa
Beit Anan
Kh. Umm Al-Lahim
Al-Qubeiba
Beit Iji'a
Beit Duqqu
Beit Nabala
Al-Jib
Al-Jalazun Refugee Camp
Qalandiya RC
Al-Ram
Dahiyat Al-Barid
Neve Ya'aqov
Pisgat Ze'ev
Ramot Allon
Ramot Shlomo
Beit Hanina
Shu'afat
Al-Isawiya
Sheikh Jarrah
Wadi Al-Joz
Old City
Al-Tur
Silwan
Ras Al-Amud
Abu Tor
Arab Al-Jahalin
Abu Dis
Al-Eizariya
Ar-Ram
Qalandiya
Ma'ale Efraim
Mizpe Yeriho
Ma'ale Mikhmas
Kfar Adumim
Al-Hadidiya
Al-Uqbadiya
Wadi al-Nar
Al-Khas
Nu'man
Jericho
Ein Sultan
Al-Qasaiba
Umm 'Asla
Umm Al-Taka
Jericho
Bureid'a
Al-Asakira
Khallet Al-Louza
Zakariya
Beit Sahur
Bar Salah
Sur Baher
Um Tuba
Sheikh Sa'ad
Sawahira a-Sharqiya
Beit Iksa
Beit Jala
Ayda RC
Al-'Aza RC
Al-Khadr
Ad-Doha
Ad-Duheisha RC
Beit Sahour
Beit Ummar
Beit Fajar
Beit Kahil
Beit Ta'mir
Beit Sira
Beit Liqya
Beit Iksa
Beit Anan
Beit Duqqu
Beit Nabala
Al-Jib
Al-Jalazun
Qalandiya

区もヨルダン川西岸も全面的にイスラエル軍の占領地になり、イスラエルの国籍を有するパレスチナ人を除けば、パレスチナのパレスチナ人は基本的に占領下に置かれてきた。したがって、水道、道路、病院、学校などの社会・経済インフラはイスラエルに依存してきた。また、パレスチナは農業以外の産業が育っていないため、イスラエルへの出稼ぎやサウディアラビア、クウェート、アラブ首長国連邦など湾岸の産油国への出稼ぎによる送金によって生計を立ててきた。産油国に出稼ぎをしていたパレスチナ人の多くは、湾岸戦争時にアラファト議長がイラクのサッダーム・フセインへの支持を表明したことにより産油国を追われ、その人口は 40 万人にも達すると言われている。アラファト議長の死後明らかになったように、自治政府は巨額の汚職を働いた。世界各国から集められた自治政府への資金援助が、アラファト議長をはじめ自治政府の幹部の私服を肥やすことに費やされた事実は、パレスチナでの経済・社会インフラ整備が自治政府自らによって闇に葬られてきたことを示している。1993 年のオスロ合意以降、パレスチナへの国際的支援は UNRWA（国連難民支援機構）などの国連関連機関を経由するよりはパレスチナ自治政府に直接なされるようになったが、そのパレスチナ自治政府がそれをパレスチナ人に還元しなかったことは、何とも皮肉である。

そうしたなか、2004 年以来壁の建設が着工された。壁の建設は、パレスチナ人の生活を直撃した。グリーンの ID を持つパレスチナ人は、壁の建設前もイスラエルへの出入りが不自由であったが、壁の建設後はイスラエルとパレスチナとのあいだの検問所の数が増えており、イスラエルへの出入りはさらに厳しくなった。西岸の隔離されたパレスチナ村落は失業者で膨れ上がっており、貧困ライン（一日の現金収入が 1 ドル以下）にいるパレスチナ人は、2004 年の 55％から 2005 年には 64％に達したという見方もある[11]。

前述のようにパレスチナ内に病院や高校が人口比にみあって存在しないため、パレスチナ人の多くはイスラエル側の高校や病院に通ってきた。壁の建設後は、グリーンの ID を持つパレスチナ人は、パレスチナからイスラエル側に行くには目的に応じた通行許可証の提示が検問所で厳しく求められている。たとえば高

11　UNOCA・oPt. *Humanitarian Update,* September 2005, p.1.

校に通う学生は毎日、壁のために迂回して検問所まで行かなくてはならず、ひとつの検問所を通過するのに長蛇の列で 1–2 時間待たされる場合もある。一般に許可証を申請してもそれが受理され発行されるのに何週間、何ヶ月とかかる場合もあり、許可証の有効期限は発行するイスラエルの内務省の意思しだいであると言う。病院に行けない病人が、パレスチナの村落で病の床に伏している場面に、筆者は現地で多く遭遇した。通行証がないと引き止められた妊婦が検問所で死産する例もおこっている[12]。

写真４：アイザリヤへ抜ける検問所

12　ベツレムでの聞き取り調査による。

分離壁がもたらす物理的、経済的インパクト

アイザリヤは、エルサレムとエリコの中間に位置し、かつてはエルサレムからエリコに至る幹線道路上にあった。そのためアイザリヤは、エルサレムと西岸の都市とを往復する人々の行き来で栄えていた。しかし、エルサレムとエルサレムの東側の西岸地域とを隔離する壁が建設された後は、アイザリヤはエルサレムから完全に分断された。以前はエルサレムからアイザリヤまで車で 15 分とかからなかったのが、現在ではエルサレムから壁の検問所の近くまで車で行き、いったん車を降り、検問所を渡り壁の向こう側にいるタクシーに乗り換えるか、エルサレムからアイザリヤまで道路を迂回して 40 分かけて行くかという選択肢になる。

筆者はエルサレムからバスに乗ってアイザリヤに向かった。途中で突然壁が目の前に立ちはだかり、そこでバスの乗客は全員下車した。下車したところから数メートルのところに壁をくり抜いたような検問所があり、アイザリヤの村はその向こうにある。筆者はバスの乗客だった人たちと一緒に検問所を通過した。外国人であるため、パスポートを見せれば何の問題もなく通過できることがわかった。検問所には銃を構えたイスラエル兵がいる。身分証明書や通行許可証を手渡す相手も兵士のような服装であった。検問所を通過すると壁の向こう側に、アイザリヤ評議会の評議会長や評議員数名が筆者を待っていてくれた。

評議会長の話によれば、今はエルサレムから来ると壁を抜けたところからアイザリヤの村が始まっているが、それは物理的に壁によってエルサレムから続いていた道路が遮断されたからである。壁ができる前は、どこからアイザリヤが始まるかはっきりしないほど、エルサレムからの道は自然にアイザリヤに繋がっていたという。

写真 5 ：アイザリヤ
——壁がエルサレムと遮断している

筆者はこの検問所を 3 回通り抜けたが、アイザリヤの入り口にはタクシーが 1、2 台あるときと 1 台もないときがあった。数台の車が乗り捨てられ、パーツがすでになくなっている車がごろごろところがっていた。その前にかつてのアイザリヤの目抜き通りがあった。銀行、レストラン、食料品店などが数十件並ぶ商店街は、今は商店のシャッターの 9 割が閉まっている。廃屋のようになっている店も多い。以前はにぎやかな商店街だったとアイザリヤ評議会の広報担当の議員は語ったが、筆者には想像できなかった。一言でいえばそれは廃墟であった。中心街だった面影など今はどこにもない。

このような状況下、最も深刻なのは雇用問題である。エルサレムの東側に位置する村落における失業率は高く、2005 年 12 月の時点で住民の 4 割近い人々が貧困ラインにいると言われている。アイザリヤもそうした村落のひとつである。

このように、経済的な打撃は、壁でアイザリヤがイスラエルと物理的に遮断されたことにより、人の行き来が途絶えてきたことからおこっている。しかし、壁の建設がもたらした経済的な負の効果はそれだけではない。最も深刻なダメージは、イスラエルへの出稼ぎが困難になったことである。イスラエルとパレスチナとのあいだの検問所がパレスチナ人の移動を監視してきたのは、今に始まったことではない。これまでも検問所はあったが、壁の建設とともに検問所の数も増えている。検問所の数の増加は、パレスチナ人のイスラエルへの出入りをさらに困難にしている。グリーンの ID を持つパレスチナ人は、前述のように用件ごとの通行許可証がなければ、イスラエルに行くことができない。壁のせいでイスラエルでの就労の機会を逸したパレスチナ人は多い。

引き裂かれた家族

壁の建設は、イスラエルとパレスチナに家族を引き裂く場合もある。たとえば、エルサレムで仕事をしているバシールさん（夫）は、壁が建設されて以来エルサレムに単身赴任している。彼の奥さんと子供は壁の向こう側のパレスチナのアイザリヤ村に住んでいる。バシールさんの子供二人は、父親のIDを受け継ぐことができるため、ブルーのIDを持ち、イスラエルへの移動は法的には問題にならない。他方、妻のミーナさんは結婚する前からグリーンのIDを持ったパレスチナ人で、ガザや西岸でしか移動できない。結婚したことによってブルーのIDに自動的に切り替えられるわけではないため、1歳と2歳半の子供を抱えたミーナさんは、壁が建設される前から住んでいるアイザリヤに居残って子育てをしている。仕事がアイザリヤにはないため、バシールさんはエルサレムに住んで仕事をしているのである。奥さんは夫のいるエルサレムに行く許可証がなく、夫を訪ねることはできない。バシールさんは、月に1–2回家族に会いにアイザリヤに来ているが、その度に検問所でイスラエル兵士に尋問される。「そんなにパレスチナに行きたいなら、ブルーのIDを取り上げてグリーンのIDにしてやろうか」と脅されることも多いという。検問所がいつ開きいつ閉まるかも、ブルーのIDを取り上げるかどうかも、すべて検問所に勤務するイスラエル兵士の恣意性に委ねられている現況から、そのような脅しもそれがいつ現実になるかわからない、とバシールさんは語っていた。

このような話はパレスチナに行けばよく聞く話であり、日常茶飯事である。また、壁の建設によってパレスチナ人家族がいかに離散した状況に追い込まれたかについては、イスラエル及びパレスチナの人権関連のNGOが詳細に記録をとり蓄積している。

写真６：久しぶりに再会するパレスチナ人の家族
――右からミーナさん、バシールさんと
２人の子供、筆者、アイザリヤ評議会長

おわりに

本稿で取り上げた分離壁の建設は、シャロン政権下で加速度的に進み、さらにオルメイト現政権にも引き継がれた。シャロン首相が打ち出した「一方的分離」政策（Disengagement）が具体的な形を取ったものである。この政策の下で実施された 2005 年 9 月のガザ地区からのイスラエル軍の撤退は、主としてイスラエルの経済的なコストから算出されたものであった。すなわち、ガザ地区の治安の維持にかかる費用対効果から換算し、これ以上入植地を維持したり占領し続けたりするのは得策でないとの判断であった。ガザ撤退とともに、西岸の 4 つの入植地も整理したが、主要な入植地は西岸に残した。既述のように分離壁の建設は、イスラエルの入植地をイスラエル側に取り込むように巧みに計画され実行されてきたことを鑑みれば、文字通り分離がいかに「一方的」なものであるかは自明である。

ハマス政権が発足することはイスラエルにとっても欧米にとっても晴天の霹靂であった。イスラエルは、予想外の事態に対し、ハマス支持者の大拠点であるガザ地区を再占領することでハマス政権の基盤を崩す選択を採ったものと考えられる。他方、西岸に対するイスラエルの分離壁の建設は、2000 年のイスラエル軍の大規模な軍事的攻撃への反発としておこったパレスチナ人の自爆テロが続発するなか、労働党のバラク政権下で決定されている。今年中に完成する 680 キロメートルの分離壁は、労働党政権からリクード、中道派政権へと継承されたものである。そこには、イスラエル市民をパレスチナ人から守るという固い信念と、パレスチナ人に対する深い不信感があり、「パレスチナ人がイスラエルを承認しない限り、基本的に関係を断絶する」という政治意思がある。

分離壁は、物理的に西岸の ID を持つパレスチナ人をイスラエルから遮断している。今や西岸を南北に分断しつつある壁が、パレスチナ人同士すら行き来できない状態になっている。その人道的なインパクトについては、本稿で論じたとおり、どのような基準をもってしても人権の侵害以外の何ものでもない。2004 年 6 月の国際司法裁判所の判決でも、その点に言及し、壁の建設のルートの見直

しを勧告した。

分離壁は物理的な断絶であり、それがもたらす悲劇は現実に存在する。しかし９メートル近い壁の前に立ったとき、筆者が肌で感じたのはシュールレアリズム[13]な感覚であった。壁は歴然と目の前にあるのだが、その光景は同時にあまりに非現実的なのである。西岸地域では、道を歩いていてそのまま歩き続けようとすると、壁が突然立ちはだかる場所に何度も遭遇する。それはまるで、人間が地道に続けてきた日々の営為にノーを突きつけるかのようである。壁の前で人々は一瞬立ちすくむ。だが、何らかの方法でその壁を越えていく人々がいるのも事実である。

壁の建設がエルサレム近郊で進むにつれ、筆者が調査したアイザリヤなどエルサレムの東側のパレスチナ村落は一部ゴーストタウンのようになっている。かつてそこに住んでいた人々はどこに行ったのか。その多くは東エルサレムに移住しているのである。不法移住者もいると言われているが、壁を着々とつくっても、パレスチナ人人口は東エルサレムで増えている[14]。壁を超えられずパレスチナに閉じ込められている高齢者や病に伏している人々の悲劇とは別に、パレスチナ人人口を西岸側に分離しようとしても東エルサレムで増えていく現実が他方存在する。壁がある限り、人間は壁を越えるのも真実である。

絶対に崩れないと言われたベルリンの壁は、1989 年 11 月一夜にして崩れた。もちろん、その一夜を創ったのは長いあいだ闘ってきた人々の努力の蓄積である。9 メートル近い分離壁は 6 メートル前後だったベルリンの壁より高い。だが人間

13 「シュールとは、現実離れしたさま、普通の理屈では説明できないさま、難解で奇抜なさま、幻想的なさま、不条理なさま、意外なさま、非日常的なさまを指す言葉」とされている。また語源は、「20 世紀前半の前衛芸術運動であるシュールレアリズムから」来たものであると説明されている。〔フリー百科事典ウィキペディア［http://ja.wikipedia.org/wiki/]〕

14 以下の文献を参照。Kaimari, Muhammad, “Understanding the Socio-Cultural Facts Created by Planning East-Jerusalem,” International Peace and Corporation Center, (http:// www.ipcc-jerusalem.org/Mona). Narullah, R. & Khamaisi, R. & Brooks, R. & Abu-Ghazaleh R. *The Wall of Annexation and Expansion: its impact on Jerusalem area.* Jerusalem International Peace and Corporation Center, 2005. Palestinian Central Bureau of Statistics. *Demographic and Social Consequences of Sepraration Barrier on the West Bank.* April, 2004.

が人間を遮断したり断絶したりすることは、人間の本性ではない。壁が建設されたということは、やがては壁が崩壊するということの始まりである。それは分離壁が非現実的なものであるがゆえ、且つまた非現実的な壁が存在するのが現実であるがゆえになのである。

（2007 年 1 月 8 日）

参考文献

Burnstein, Avram S. *Crossing the Green Line: Between the West Bank and Israel.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2002.

Kaimari, Muhammad, "Understanding the Socio-Cultural Facts Created by Planning East-Jerusalem," International Peace and Corporation Center, (http:// www.ipcc-jerusalem.org/Mona)

Lochery Neill. *The View from the Fence: The Arab-Israeli conflict from the present to its roots.* London & New York: The Continuum International Publishing Group, 2005.

Narullah, R. & Khamaisi, R. & Brooks, R. & Abu-Ghazaleh R. *The Wall of Annexation and Expansion: its impact on Jerusalem area.* Jerusalem International Peace and Corporation Center, 2005.

Palestinian Monitoring Group, "Special Report: Confiscation of Land in the West Bank, including Occupied East Jerusalem since 01 January, 2005," August 25, 2005.

Palestinian Central Bureau of Statistics. *Demographic and Social Consequences of Sepraration Barrier on the West Bank.* April, 2004.

Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs. Conflict over Jerusalem.(http://www.passia.org/jerusalem/publications/conflict Over_J_Text.html)

----------. *Municipal Policies in Jerusalem: An Account from Within.* 1998.

UNOCHA Home Page (various articles and statistics on Palestine and walls)

UNRWA, *Reports on the West Bank Barrier.* March 2004.